

コモンセンスへの挑戦——女性と子供

新 谷 好
(追手門学院大学助教授)

三島由紀夫はワイルドの「批評精神」を高く評価している。確かにワイルドは「芸術家としての批評家」(1890)の中で、ギルバートに「我々をコスモポリタンにするのは批評である」と語らせている。批評精神のあるワイルドであればこそ、アメリカ滞在中、ヘンリー・ジェイムズに「ロンドンへの郷愁にとても駆られますよ」と話しかけられると、「本当に？ あなたは場所のことを気にされるのですか。私の場合は、世界が私のホームですよ」と答えている。

さて、「知性の面で霧の立ちこめている」英国の空気を一新するため、ワイルドは、バーナード・ショーと競作している。そして、「アイルランド派の作品第一番」と記してショーに献本したのが、『レディ・ウィンダムアの扇』(1892)である。この劇の原題は、‘A Good Woman’だったのである。また、『何でもない女』(1893)に関しても、ワイルドは、「この劇は女性の劇です」と述べている。それ故、この劇に登場するアロンビー夫人は、「我々(=女性)は、いつもコモンセンスに対するビクチャレスクな抗議そのもの」と定義するように、ヴィクトリア朝のコモンセンスに挑戦するのは、社会的抑圧の厳しい「女性」ということになる。ワイルドの『理想の夫』(1895)という題名も、Kerry Powellの指摘では、「1890年代の『理想の夫』を扱った劇は、演劇の流行以上の産物である。これらの劇は、後期ヴィクトリア朝文学やジャーナリズムで継続審議された議論的で、そのことは、男女の結婚と関係という伝統的な理想が以前に決してなかった程に挑戦状を叩き付けられていたことを明白に物語っている」ということになる。この劇に登場するガートルードは、「女性リベラル協会」に所属している。これは、ワイルド夫人のコスタンスの場合も同様で、A. C. Amorは、コスタンスは「チェルシーの女性リベラル協会の会員で、列をなして押し掛けた、主に働く女性の間では重要人物だった」と指摘している。また、メイベル・チルトンは、武者小路実篤の『愛と死』(1939)に登場する野々村の妹夏子同様、ピアノの脚すら見えてはいけなかった時代に、逆立ちする‘wild’な女性である。さらに、チーヴリー夫人は、第三幕で「シガレットを吸ってもよろしいですかしら」という台詞を話すことになっていたようである。このように、ワイルドの描く女性は、彼の性癖にもかかわらず、魅力的ではないだろうか。『ヴェラ、或はニヒリストたち』(1880)のヒロインなども過激ではあるが、魅力的な「新しい女性」である。

ところで、日本でも「女性問題」が盛んに論じられているが、英国では、夫に255年間与えられていた夫婦間のレイプ訴訟の免責特権が剥奪される歴史的な判決が昨年下され、「結婚は、現代では対等な人間同志のパートナーシップとして見なされ、妻が夫の従属的な持ち物であるパートナーシップとしてはもはや見なされていません」(11月3日付の*Guardian Weekly*)という一文が見受けられる。

Richard Ellmannは、「ワイルドは、決してコスタンスの部屋に許可なしに入らないことをいつも心がけていた。彼がある書評の中で“男性は、これまで男性にとって非常に貴重な、結婚生活での横暴を断念しなければならない。確かに、今なおそういう横暴は、あちこちに残っていると懸念しますが”と述べたように」と、ワイルドの奥さんに対するリベラルな態度に言及している。

また、ワイルドは、ヴィクトリア朝のコモンセンスに対するに、子供の視点を設けている。H. M. Hydeは、ワイルドの言葉として、「子供の心は非常に神秘的である。子供の心は、計り知ることも出来ないし、誰かがそれを見抜いて、彼特有の喜びを子供の心にもたらすことなどどうして出来ようか」と述べている。例のドリアンでさえ、最初に登場する時は、ピアノの傍らに座って、シューマンの「森の情景」の楽譜を繰るパストラル的な(子供のような)人物である。「純真でイノセントな」子供は、快樂原則に従うものであり、コモンセンスを打ち砕くナンセンスに打ち興ずるものである。三島由紀夫の『午後の曳航』(1963)でも見事に残酷な子供の視点が導入されているが、ワイルドの「王女様の誕生日」(1889)に登場する王女も、「これからは私の所に遊びに来る人たちはハートを持たない人にしてね」と叫ぶ12歳になったばかりの子供で、サロメの原型とも言うべき存在である。

子供とヴィクトリア朝文学との関連について、Nina Auerbachは、「子供の天性の誠実さ、つまり、我々自身の性質に対して子供の有する権威というものは、ヴィクトリア朝文学が固守し同時に敵対する、独特なヴィクトリア朝の神話である」と要約している。J. M. Barrieの*Peter and Wendy* (1911)の最後が「子供たちが陽気でイノセントで冷酷である限りは」という言葉で締めくくられているように、子供の属性である‘gay’ ‘innocent’ ‘heartless」という特徴がワイルドの作品には見受けられ、童話に限らず、彼の作品には、子供と大人、無垢と退廃、そして田園と人工の世界といった対極的な要素が顕著に認められる。